RSウイルス母子免疫ワクチンの助成に関する要望書

日頃から、道内の保健・福祉分野、特に周産期医療や小児に関わる幅広い課題に対しご支援をいただき、厚く御礼申し上げます。

RSウイルスは世界中に広く分布しており、生後2歳までにほぼ100%が感染し、乳幼児における肺炎の約50%、細気管支炎の50~90%がRSウイルス感染症によるとされています。特に、生後6か月未満で感染すると重症化することが示されており、合併症として無呼吸、急性脳症など、後遺症としては反復性喘鳴（気管支喘息）があります。日本では、毎年約12万~14万人の2歳未満の乳幼児がRSウイルス感染症と診断され、約3万人が入院を必要とすると推定されていますが、有効な治療薬はありません。

2024年1月18日に「妊婦への能動免疫による新生児及び乳児におけるRSウイルスを原因とする下気道疾患の予防」を適応症として、組換えRSウイルスワクチン（販売名：アブリスボ筋注用、以下、RSウイルス母子免疫ワクチン）が製造販売承認を取得し、2024年5月31日に販売が開始され、一般診療でも接種可能となりました。

RSウイルス母子免疫ワクチンの機序は母子免疫であり、妊婦に接種することにより母体のRSウイルスに対する中和抗体価を高め、胎盤を通じて母体から胎児へ中和抗体が移行することで、乳児におけるRSウイルスを原因とする下気道疾患の予防に寄与することが期待されます。

つきましては、新生児・乳児・幼児のRSウイルス感染症の予防や重症化抑制のため下記の事項について要望します。

記

1. RSウイルス感染症予防の重要性について北海道内の各市町村を挙げて妊産婦へ啓蒙を着実に進め、RSウイルス母子免疫ワクチンに関する理解が進み、接種を希望する妊婦への経済的負担の軽減など、接種しやすい環境を早急に整備すること
2. 乳児の健康管理の上で、小児科医師に対して、妊娠時におけるRSウイルスワクチンの接種歴の有無を正確に伝えることは重要であり、妊娠24~36週に本ワクチン接種を施行した際、母子健康手帳への予防接種の記録と接種歴の伝達を確実に進めること

令和6年10月8日

北海道産婦人科医会
会長 西 川 鑑
北海道小児科医会
会長 土 田 晃